
ホットニュース(平成16年度／第75号)

●今月の業界ホットニュース／中国便り・その4

北京の今のシーズンは、連日35度前後の暑い日が続いています。先週は、四川省の省都・成都から60kmほど離れた徳陽市にいました。市の中心区は、1960年代に軍需基幹工業を内陸部に移転したいわゆる三戦開発で重機械工業が設けられて発展した、比較的新しい街といえます。広い通りと中高層建物で造られた、どこにでもある近代都市といった感じで、活気に溢れた狭い通りも目にかからず、前回訪れたときは面白くない街だと思っていたところでした。

今回は時間に余裕があったので街なかを歩き回っていたところ、珍しい光景に出くわしました。スポーツ公園内にあるスタジアム下の周りの通路が、飲食店で埋まっており、市区内で最も活気のある喧噪な空間と化しているのです。東京でいえば、神宮球場のスタンド下の回廊が飲食店で埋まっていることになります。公園内の公共施設ですから、日本では考えられないと成都からきた通訳にいうと、成都市でもかかんがえられないと言っていました。公共空間の不法な利用から始まった博多の屋台みたいなものでしょうか。

いずれにしても、公共が新しい街づくりのなかでこの種の空間を用意できなかったために、民間が自然発生的に都市生活に必要な活力空間を生み出したと言えるかと思います。また、公共空間の利用には厳しい規制があるが、様々な利用の仕方が考えられ、選択的に規制を緩和すれば街の活性化に活かすことができるのではないかと思います。この2点で、中国西部の地方都市で、街づくりの参考になる光景を見た思いです。

(代表取締役 堀田 紘之)

●コミュニティ交通におけるバイオマス燃料の活用について

近年、多くの地域でモビリティを確保するために、計画・実施に自治体やNPOが関与するコミュニティ交通が導入・運行されている。これらの中には、利用客数が十分でないため財政的にも維持が困難になったり、新規の開設要望にもこたえられないケースがある。バイオマス燃料を活用し、地域全体の活性化を図る中でコミュニティ交通を維持・発展させていくシナリオを提案する。

これまで、てんぷら油など廃食油をディーゼル代替燃料として利用する例があるが、品質が不安定、安定供給の不安、地域活性化への波及が不十分と思う。そこで、地方部における農業と観光の振興を実現する景観農業として注目される菜の花やひまわりをバイオ代替燃料として活用したい。この菜の花やひまわりから搾油し、メチルエステル化して軽油代替燃料として活用する。この過程の中で、農業、観光、製造、運輸の各部門で新規の雇用・投資・所得拡大が期待できる。こうした地域全体の活性化の中で、コミュニティ交通の維持・発展を模索することが考えられる。

また、こうしたバイオマスの効率的な活用モデル(残滓や廃液処理を含む)を確立すことにより、わが国の運輸部門における温室効果ガス削減に寄与するとともに、この経験を海外に活用して、クリーン開発メカニズムによる排出権獲得の展望も開くことができよう。

(第一計画部 矢島 充郎)

●町の元気を生み出す地元活動組織の設立について(実績報告)

平成14・15年度において、新潟県柿崎町における地域振興計画に携わった。柿崎町は新潟県の南西部に位置し、町の西側は日本海、東側は山地に面しており、中央の平野部では稲作を中心とした農業が盛んであるが、少子高齢化、就業者数の減少などの課題を抱えている。また、平成17年1月には上越市をはじめとした14市町村の合併構想に含まれている。

当町の地域振興については、海と山などの良好な自然環境を活かした様々な展開が期待されるが、これを“誰が企画して実行していくのか”が重要であり、そのためには積極的に地域振興の活動に携わる“人材育成＝人づくり”から始めて、こうした人材の連携を促進して“活動の総合力を高める＝輪づくり”に発展させ、様々な活性化施策の展開による“交流人口の創出＝賑わいづくり”といった段階的な取り組みを基本方針として各種検討を実施した。

前述したように平成17年には市町村合併が控えているため、地域振興を展開する組織の設立と組織が実施する具体的な取り組みの実現について検討期間中に少しでも前進させることを命題として取り組んだ。幸いにも当町では町内で積極的に活動する団体が様々あり、結果としての12の活動グループが中心となって合併後も柿崎らしさを育て自立できるコミュニティづくりを推進する「ネット柿崎」という組織が設立され、16年度の活動第1弾として5月の連休中に、地元の食材を活かした鍋の味を参加者の投票で競う「柿崎なべ輪(りん)ピック」が開催された。当日はあいにく雨天であったが、それでも約千人の参加者が集い“快晴だったら大賑わい過ぎて大変なことになっていた…”とネット柿崎のメンバーは次年度への手応えを掴んだ様子である。

ネット柿崎の今後の活動は、夏の海水浴客に山の魅力も堪能してもらう狙いで「山荘での地場産品販売」、柿崎の魅力について町民全員の共通認識を図る「柿崎魅力発見シンポジウム」の開催などのイベントが控えており、さらにネット柿崎のNPO法人申請の準備も行うこととなっている。

今回の調査検討を通じて、筆者を含め担当者はすっかり柿崎のファンになった。それはひとえに“地元で活動する方々のやる気”とこれを真摯にサポートする町役場担当者に心打たれた点にある。地域振興を展開するうえで地域魅力の活用は当然ながら、やはり「地域の人材」が最も重要であることを身をもって再認識する貴重な経験となった。この場を借りて地元の方々にお礼を申し上げたい。

(第二計画部 海口 晴彦)

アルメックホットニュース(平成16年6月15日発行)

////////////////////////////////////